様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年９月 18 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2009～2011 年
課題番号：21520094
研究課題名（和文）エドゥアール・マネ研究　-批評と受容の視座から-

研究課題名（英文）Studies in Edouard Manet - From the viewpoint of criticism and reception

研究代表者
三浦 篤（Miura　Atsushi）
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：10212226

研究成果の概要（和文）：

マネの主要作品について 19 世紀当時の批評を調査し、その受容の様相を分析した。取り上げたのは《草上の昼食》、《オランピア》、《エミール・ゾラの肖像》《フォリー・ベルジェールのバー》、《鉄道》の５点で、その批判的な反応から、マネの作品が主題の扱い方、様式・技法のレベルにおいて、いかに当時の美的な基準を逸脱していたかが明らかになった。本質的には、マネの絵の曖昧さや多義性が観者の読解を混乱させたのである。

研究成果の概要（英文）：

I made research on the criticism of the major paintings of Manet and analyzed aspects of their reception. Five works treated are “Luncheon on the Grass”, “Olympia”, “Portrait of Emile Zola”, “A Bar of the Folies-Bergère”, “Railroad”. The critical reactions on these works reveal how they deviated from aesthetic criteria of the era on the levels of treatment of subject, style and technique. Essentially, ambiguity or polysemy in Manet’s paintings put the comprehensions of spectators into confusion.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学、美学・美術史
キーワード：マネ、19 世紀フランス絵画、美術批評

１．研究開始当初の背景

マネに関しては、その生涯と作品に直接関わる基礎資料の整備はほぼ終わっている。しかしながら、生涯にわたって展覧会に出品し続けたマネの作品が、とりわけサロン（官展）においていかなる反応に遭遇したのか、通常のサロン絵画とどのように違うのかという視点は、徹底的に踏査考究されているとは言い難い。賞賛にせよ批判にせよ、マネの絵がいかなる評価とともに公衆や批評家に受容

されたのかという問題は、作品の意味を歴史的な文脈に即して解明しようとするとき必要不可欠と思われるのだが、研究課題としては未だ充分な達成を見ているとは言えない。

以上のような研究の現状と申請者の研究蓄積を踏まえた上で、今回の調査研究ではマネの主要なサロン出品作を 5 点選び、申請者自身の手であらためて批評の反応を可能な限り精査することによって、画家理解と作品解釈、およびその歴史的意義に関して新しい視座を提出し、マネ研究を刷新することを目的とした。

その 5 点とは、マネの 1860 年代を代表する《草上の昼食》(1863 年、同年落選者のサロン）と《オランピア》(1863 年、65 年のサロン)、1860 年代後半と 1870 年代前半の時期をそれぞれ代表する《エミール・ゾラの肖像》(1868 年、同年のサロン)と《鉄道》(1873 年、同年のサロン)、そしてマネの晩年を代表する《フォリー＝ベルジェール劇場のバー》(1882 年、同年のサロン）にほかならない。マネの画業全体を象徴すると言っても過言ではないこれら 5 点の絵の受容の様態を、当時の文脈に即して徹底的に調べ直し、他のサロン絵画とも比較しながら作品解釈を再検討することは、未だ不可解で、イメージの定まらないマネという画家を解明する大きな手がかりになるであろう。

２．研究の目的

まず、《草上の昼食》、《オランピア》、《エミール・ゾラの肖像》、《鉄道》、《フォリー＝ベルジェール劇場のバー》の 5 作品が、サロンに出品されたときに新聞雑誌に発表された批評記事や戯画（カリカチュア）を洗い出すことから作業を始める。マネは自らの作品の制作意図についてほとんど言葉を残しておらず、同時代人の証言も作品そのものに関しては決して豊富とは言えない。むしろサロン批評を通して、マネの絵が示す斬新さ、伝統からの逸脱ぶりが、逆に浮き彫りになり、現在の眼差しだけでは分からない多様なニュアンスや意外な評価が明るみに出ることになろう。また、比較対象となるサロンに出品された他の絵画作品の探索も必要となる。

そして、批評と受容の基礎調査に基づいて、《草上の昼食》に関しては、マネがさまざまなイメージ・ソースを引用し、組み合わせ、コラージュしていくその根本的な手法について、他の資料も交えながら考察していく。《オランピア》については、ヌードの表象という観点から、同時代のイメージ資料との比較検討を行うと同時に、ティツィアーノの《ウルビーノのヴィーナス》からピカソの《アヴィニョンの娘たち》にいたるヌードの系譜における位置づけを再考したい。《エミール・ゾラの肖像》に関しては、画中に多様な複製画像を配置して作品を意識的に構成していくマネの美的なアプローチについて解析していくことになる。また、この作品と関連して、マネにおけるジャポニスムの問題も視野に入れたい。《鉄道》は 1870 年代に印象派の画家たちと並行して近代的な主題を扱った典型的な作例である。文字資料のみならずサロン戯画や当時の写真も参照しながら、一方でマネの人物画に特徴的な状況設定の曖昧さ、イメージの多義性の問題を、他方で速度の表象や筆触の問題を検討していきたい。《フォリー＝ベルジェール劇場のバー》はマネの最後を飾る大作であり、既にさまざまな方法論、とりわけ社会史的なアプローチによって分析されている。申請者は 1882 年のサロン批評の読み直しを通じて、むしろ絵画と鑑賞者との関係を基軸において、独自の解釈を試みたい。そして最後には、《オランピア》を代表例として取り上げて、19 世紀後半から 20 世紀、21 世紀に向かうマネ評価の流れを追跡調査し、合わせてモダニズムの絵画観の再検討を行う予定である。

以上のように、異なる主題、テーマ、様式、技法を示すマネの代表作 5 点を選び、サロン批評を足場に作品研究を行うことによって、マネという画家のはらむ主要な絵画史的問題(イメージを引用構成する手法、ヌード表現の伝統と逸脱、複製画像とジャポニスム、近代的主題の表象と印象派との関係、絵画と観者との関連性、マネ評価史とモダニズムの再検討など）を、精密に考察していく。その結果を踏まえて、マネの新たな全体像と美術史的位置づけを提案することになるであろう。

３．研究の方法

サロン批評調査に関しては、基本的にパリのフランス国立図書館で行う。申請者は《草上の昼食》については重要な批評記事を既に収集しているが、今回の調査では 1863 年の落選者のサロンとマネの作品に言及した新聞雑誌記事を網羅的に探索する。また、批評記事の蓄積がない《オランピア》に関しても、1865 年に刊行された新聞雑誌

の悉皆調査を行う。そのためには、最低でも年間３週間程度はパリに滞在し、資料調査に時間を割く必要がある。幸いなことに、第２帝政期の新聞雑誌に掲載された美術批評記事のリストは存在するので、1863 年と 1865 年に限ってリストに掲載されたすべての記事を図書館で閲覧して、マネ関連記事の発見に努める。蓄積した資料は日本に持ち帰った後、アルバイトを使って整理するとともに、パソコンに電子データとして打ち込むつもりである。

また批評調査と並行して、作品調査も実行する。《草上の昼食》、《オランピア》、《エミール・ゾラの肖像》はパリのオルセー美術館に展示されているので、パリ滞在中に作品自体を実地に観察、調査することができる。のみならず、オルセー美術館の絵画資料部で２作品についての関連資料も必要に応じて調査する。《フォリー・ベルジェールのバー》はロンドンのコートールド美術研究所に所蔵されているので、パリ調査旅行の途中で実地調査に行くことはできる。ワシントンのナショナル・ギャラリーが所蔵する《鉄道》については、日本での展覧会で詳しく実見している。

こうして批評と作品の基礎的な調査によって、本研究の足場を固めたい。また、調査旅行後も日本で引き続き研究を進めるためには、当該テーマに関連する 19 世紀フランスの古文献資料を可能な限り入手して手元に置き、研究を深めることが望ましい。

このように基礎資料の収集、それに基づく考察と補足調査という段階を踏みながら、上記の５作品に関して研究を進め、最終的に歴史的な文脈に沿った説得力のあるマネ解釈、作品解釈に到達することを目標としている。

４．研究成果

平成 21 年度は《草上の昼食》と《オランピア》に関するサロン批評を調査し、分析した。前者に関しては、1863 年の落選者のサロンの批評の中に言及があり、男女のピクニックという主題の不道徳性、遠近法やデッサンなど技法の欠如などが批判の対象となったことが理解できたが、作者の意図、絵の意味が不可解だという反応も目立ち、通常の絵画の基準を逸脱するマネの作品の特質が明らかになった。1865 年のサロンで大スキャンダルを起こした後者に関しては、相当数の批評が確認され、やはり西洋絵画のヌードの伝統を否定するその斬新さが、主題、様式の両面でさまざまに非難されている。《オランピア》については、ティツィアーノの《ウルビーノのヴィーナス》との関係、サロン絵画との比較、娼婦の表象等々の観点から分析結果をまとめ、『ヴィーナスの変貌』（三元社）という論文集に掲載された。この他、マネにとってきわめて重要な画家ベラスケスが与えた影響を再考するための調査も行った。とりわけ 1865 年のスペイン旅行をはさんだ時期と晩年において、マネにとってベラスケスの存在がいかに大きなものであったのか、その本質的な共通性も含めて考察の成果を論文にまとめて発表した。さらに、1870 年代の作品《オペラ座の仮装舞踏会》の２つのヴァージョンの様式を比較して、これまで下絵と見なされてきたブリジストン美術館所蔵作品が実験的な独立作品であることを論証する発表をシンポジウムで行い、その結果をフランス語で論文にして刊行した。

平成 22 年度には、サロン批評の調査に関しては、パリのフランス国立図書館でマネの《エミール・ゾラの肖像》と《フォリー・ベルジェールのバー》に言及した新聞雑誌記事を収集し、整理した。同時に作品調査も行い、《エミール・ゾラの肖像》（パリ、オルセー美術館）と《フォリー・ベルジェールのバー》（ロンドン、コートールド研究所付属美術館）を綿密に実地観察した。また、関連資料もオルセー美術館の絵画資料部で調査した。続いて、収集した批評の詳しい読解を行い、作品に対する当時の反応、受容を具体的に解析した。《エミール・ゾラの肖像》については、とりわけ当時の肖像画様式を逸脱し、静物画にも通じる独特の人物表現が指摘されていた。《フォリー・ベルジェールのバー》に関しては、鏡像と女性の表情の矛盾や不可解さへの言及が見られるほか、新資料として２点の興味深いカリカチュアを発見した。ともに、マネの作品の特徴である、忠実な現実再現ではなくイメージを操作しつつ画面を構成していく手法、作品の読み取りを混乱させる曖昧さや多義性につながっていくことを裏付ける批評資料である。造形分析だけではなく、このような同時代資料を活用することで、マネの作品と当時の慣習的な絵画理解との落差があらためて浮き彫りになった。研究の成果は、前年の調査を踏まえて《オランピア》に関する分析を深めた論文と、今年度の調査を生かして《フォリー・ベルジェールのバー》についての新視点を出した論文の２本にまとめて発表した。

平成 23 年度のサロン批評の調査に関しては、パリのフランス国立図書館でマネの《鉄道》に言及した新聞雑誌記事を収集し、整理した。ドイツの美術館で作品調査も行い、《アトリエの昼食》、《アトリエ船のモネ》（ミュ

ンヘン、ノイエ・ピナコテーク）と《温室》（ベルリン、国立絵画館）を綿密に実地観察した。また関連資料についてはオルセー美術館資料室で調査した。続いて、収集した批評の詳しい読解を行い、作品に対する当時の反応、受容を具体的に解析した。《鉄道》については、とりわけ当時の批評家たちがその人物表現に戸惑い、困惑し、解釈の非決定性に陥っていたことが判明した。そのことは数点存在するこの絵のカリカチュアを見ても理解される。さらに蒸気機関車の表現の斬新さも検討した。汽車の車体そのものを描かずに、煙突から出る白い煙だけでその存在とスピード感を示唆する手法は、当時あまり例を見ない。また画面右下に見える葡萄の存在も興味深い。作品の記号論的な分析によって、そこに五感の寓意という意味を読み込むことも不可能ではない。全体としては、マネの作品の特徴である、忠実な現実再現よりもイメージを操作しつつ画面を構成していく手法、作品の読み取りを混乱させる曖昧さや多義性が明らかになったと言える。同時代資料と造形分析を併用することで、マネの作品と当時の慣習的な絵画理解との落差があらためて浮き彫りになった。研究成果の一部は、2011 年 10 月にフリブール大学で行われたシンポジウムで発表したが、さらに論文のかたちでその成果を公表したい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 10 件）
①三浦篤, 近代都市表象の行方—明治洋画と印象派の受容, 美術フォーラム 21, 18 号, 2009, p.69-73

②三浦篤, マネとベラスケス, スペイン・ラテンアメリカ美術史研究, 11 号, 2010, p.1-12

③三浦篤, マネ《オランピア》－ 横たわる裸婦像の集約と解体, 『ヴィーナス・メタモルフォーシス』, 2010, p.171-222

④三浦篤, 《フォリー・ベルジェールのバー》再考, 『国際シンポジウム　エドゥアール・マネ再考 － 都市の中の芸術家』, 2011, p.63-81

⑤三浦篤, 絵画に描かれた駅, 『世界の駅・日本の駅』, 2011, p.191-211

⑥三浦篤「パウル・クレーと印象派」『ユリイカ』594 号、2011 年 4 月、p. 167-172.

⑦三浦篤「選択的摂取としての受容」『美術フォーラム 21』23 号、2011 年 5 月、p. 36-41.

⑧三浦篤「知られざる印象派　—近年の研究をめぐる一考察—」『光を描く印象派展 —美術館が解いた謎—』カタログ、青森県立美術館、2011 年 7 月、p. 14-19

⑨三浦篤「マネと音楽」『フォーレ手帖』第 22 号、2011 年 10 月、p. 20-31

⑩三浦篤「ジャポニスムとマンガ・ブームをめぐる考察」『美術フォーラム 21』24 号、2011 年 11 月、p. 50-53

〔学会発表〕（計 12 件）
① MIURA Atsushi, Edouard Manet et la déconstruction du « tableau » - Fragmentation et touche, Génétique de la peintrue, 2009, 11, 15, 東京大学数理科学研究科大教室

②MIURA Atsushi, “Les autoportraits de Manet et de sa génération”, VIII Scuola di Primavera, « Il Ritratto », Firenze, 31 maggio – 5 giugno 2010 (4 giugno), Villa I Tatti

③三浦篤「《フォリー・ベルジェールのバー》再考」、三菱一号館美術館「マネとモダン・パリ」展開催記念、国際シンポジウム「エドゥアール・マネ再考——都市の中の芸術家」、2010 年 6 月 27 日（日）、丸ビルホール

④三浦篤「日本におけるフランス美術を考える−美術史／展覧会／文化−」、日仏美術学会３０周年記念シンポジウム、京都大学、2010 年 7 月 10 日

⑤三浦篤「混沌の時代の絵画を横断する　−アカデミスムと自然主義を中心に-」、シンポジウム「ポスト印象派とその時代　−1880ー90 年代のフランス絵画−」、2010 年 7 月 24 日,

国立新美術館

⑥ MIURA Atsushi, “Séparation et résonance: peinture et écriture en Occident et en Extrême-Orient”, « La génétique des textes et des formes: l’œuvre comme processus », Colloque organisé par Pierre-Marc de Biasi, Anne Herschberg Pierrot, Cerisy-La-Salle, du 2 au 9 septembre 2010 (6 septembre)

⑦MIURA Atsushi, Manet et le plein air sur les rivages de la Manche, L’Impressionnisme : du plein air au territoire, 2010, 9, 9, Musée des Beaux-Arts de Rouen

⑧MIURA Atsushi, “La peinture japonaise et son Académisme : de l’époque d’Edo à l’ère Meiji ”, Colloque international organisé par Barthélémy Jobert et Atsushi Miura « L’Académisme au XIXe siècle. Regards croisés », Rome, La Villa Médicis, 7, 8, 9 octobre 2010 (8 octobre)

⑨三浦篤「ゾラによる同時代美術の評価–いくつかの問題提起」、講演会「イメージとテクストをめぐる冒険」、東京大学駒場キャンパス 18 号館ホール、2010 年 11 月 10 日

⑩三浦篤「ジャポニスムとマンガをめぐる問題提起」、ジャポニスム学会、国際マンガ研究センター共催シンポジウム「ジャポニスムとマンガ : 二つの日本美」、国際マンガミュージアム、2010年12月5日

⑪三浦篤「イタリア・スペイン絵画とマネ —ラファエロ、ティツィアーノ、ベラスケスを中心に —」第35回地中海学会シンポジウム「さまよえる地中海」、日本女子大、2011年６月19日

⑫ MIURA Atsushi, « La déconstruction du tableau : Edouard Manet et la peinture française des années 1860 », Journées d’études Fribourg-Tokyo, “Méta-image & Parergon”, Université de Fribourg, 20, 21 octobre, 2011

〔図書〕（計４件）

①ゾラ・セレクション９『美術論集』三浦篤、藤原貞朗訳、藤原書店、2010 年 7 月

②三浦篤監修『吉野石膏美術財団作品目録、西洋絵画編』、公益財団法人吉野石膏美術財団、2011 年

③『光を描く印象派展 —美術館が解いた謎—』（日本展および図録）、三浦篤監修、青森県立美術館、2011 年 7 月

④『光を描く印象派展 —美術館が解いた謎—』（ドイツ展図録翻訳版）、三浦篤監修、青森県立美術館、2011 年 7 月

〔その他〕
ホームページ等
東京大学　三浦篤研究室
https://sites.google.com/site/miura1832/

６．研究組織
(1)研究代表者
三浦　篤（Miura Atsushi）

研究者番号：10262221

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：